

# A A A

ccounting,  
rithmetic &  
rt Journal



NO. 33

The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

2017. 05

## ◆ ルカ・パチョーリの生涯

エメット・テイラー著  
大東文化大学 片岡泰彦訳

この訳文は、エメット・テイラー (R. Emmett Taylor) が、1955年に執筆・公表した Luca Pacioli の日本語訳である。この論文は、リトルトン(Littleton)及びヤーメイ(Yamey)共編の Studies in the History of Accounting, London, 1956 に収められたものである。なお、エメット・テイラーは、「学問に王道なしルカ・パチョーリと彼の時代」(No Royal Road, Luca Pacioli and his Times) という大著(445頁)を、1942年に出版している。この大著の紹介を、近い将来解説したいと考えている(片岡記)

**I** ルカ・パチョーリは、15—16世紀のイタリアで不和と紛争の時代を生き抜き、活躍した人物である。当時のイタリアでは、指導的家族階級が、自分たちの地位を確保するために必死であった。家族階級と都市国家間の闘争は、時代の平安をたえず揺り動かそうとしていた。家族階級と公国との同盟の変動に、ウルビーノ、ヴェネツィア、ミラノ、フィレンツェ、ナポリ等の都市国家は対応に苦慮していた。その当時のローマ教皇(=Pope)は、教皇領を所有し、宗教的事柄と同様に政治的にもしばしば確固たる地位を有していた。フランスは一度ならず北イタリア、特にミラノを占有した。スペインは時々南イタリアを支配した。トルコはアドリア海の多くの貿易路を占領した。そしてハンガリーはダルマチア

の海岸にそって進出し、ツァーラやラグーサのような重要都市を支配した。ツァーラは、1409年にヴェネツィアによって、ハンガリーから取り戻され、約400年にわたってヴェネツィアによって統治された。ラグーサは、我々が述べる時代の多くは、共和国でもあったが、同時にハンガリーの支配下にもあったのである。

**II** パチョーリは、1445年から1450年にかけて、フィレンツェから80マイル東南、ペルージアから40マイル北に位置するチベル河付近の小さな町ボルゴ・サン・セポルクロ(Borgo San Sepolcro)で生誕した。彼は、少年時代に生地の方フォルコ・デ・ベフォルチ(Folco de Befolci)家の徒弟となった。彼の最初の勉強は、この家族の家政を通して行われたに違いない。勉強の中心は実務であった。同時に、彼の宗教上の勉強は、その町のフランチェスコ派の修道士から得られたものである。

著述家兼画家のピエロ・デラ・フランチェスカ(Piero della Francesca)は、1416年頃パチョーリと同じ生誕地で生まれた。パチョーリの少年時代にピエロはすでにボルゴ・サン・セポルクロでは有名な人物となっていた。パチョーリが少年時代、実際にピエロの弟子であったということもあり得る。多くの若者たちが、ピエロから遠近画法(*perspective*)と絵画法を学んだ。そして彼らの何人かは先生より有名になったのである。ピエロは特に遠近画法に関する多くの原稿を執筆した。パチョーリはこれらの原稿の読書を出発点として学習を始めたのである。またピエロはサン・セポルクロの北東数マイルの場所に位置するウルビーノ(Urbino)の宮廷の人々と親しかった。ピエロはウルビーノの宮廷内の有名な図書館にパチョーリを連れていき古文書の研究をパチョーリに奨めたのである。ここでの研究は、後のパチョーリの資料収集と思考の基礎となったのである。

**III** パチョーリは、若干20歳にして生まれ故郷を去りヴェネツィアへ行く。

ヴェネツィアでは大商人アントニオ・デ・ロムピアージ(Antonio de Ronpiasi)の3人の息子たちの家庭教師となった。当時の家庭教師たちは、普通の雇人とほとんど変わらなかった。しかし、パチョーリの場合は異なっていた。パチョーリは、ロムピアージ家と彼の弟子(=息子たち)の客人であったといわれている。彼は同家に約6年間滞在するのである。そして、多分1470年頃と思われるがヴェネツィアを去る時にロムピアージ家の息子たちに数学に関する最初の稿本を献呈している。この稿本はパチョーリが25歳の時に完成したように見える。パチョーリはロムピアージ家での滞在中、息子たちの教授のためにだけ時を過ごしたのではなかった。なぜなら、「この商人のため、私は商品を運搬する船に乗って旅をした」とパチョーリ自身が述べているからである。この期間中パチョーリは、自分自身の教養を高めたのである。この時期のヴェネツィアでは、哲学や神学に関する公的講習会が、1日中、国家によって開催された。いろいろな講師や講座が探し求められ、その講師の候補者たちは彼の能力とさらには人格に対する厳しい試験にパスしなければ

ばならなかった。その報酬は良かったので、候補者たちはしばしば 15 人の多きに達した。

早くも 1449 年には、パオロ・デラ・ペルゴーラが哲学、幾何学、算術を公的に教授していた。やがて、パオロの仕事はヴェネツィアの貴族ドメニコ・ブラガディーノ(Domenigo Bragadino)によって引き継がれた。ブラガディーノは、150 ゴールド・デゥカートという高い給料で、すべての科学に関する公的講師として、多くの人々によって選ばれたのである。パチョーリは、ブラガディーノの下で、数学の研究に従事した。さらにパチョーリは、有名な家族の一員であるアントニオ・コルナーロ(Antonio Cornaro)と学友となった。コルナーロは後に教師たちの仕事を引き継いだのである。そしてその後も、パチョーリとコルナーロは、長い友情を持ち続けたのである。

このようにして、パチョーリは若き日に、生まれ故郷でフランチェスコ派の僧侶たちとの宗教的な生活の中で、人生の訓練を受けたのである。そして、同じ生まれ故郷の画家ピエロ・デラ・フランチェスカから書物に対する読書への愛情と執筆に対する願望を得たのである。また彼は当時最も繁栄していた貿易都市ヴェネツィアで、ロムピアージ家での仕事を通していくつかの経験を得たのである。彼は数学の分野では優秀な教師たちと出会った。そして彼はあらゆる階級の人々と快く付き合ったのである。パチョーリは、彼自身の家族を否定しなかった。特に伯父のベネデット(Benedetto)には、好意を持っていた。ベネデットの家族名はバイアルド(Baiardo)で、パチョーリの母の兄弟であったようである。ベネデットはアンギアリ(Anghiari)の有名な傭兵隊長のバルダッチョ(Baldaccio)の部下として軍隊生活の一步を送った。ベネデットはしばしば歩兵隊長となった。最初は 1442 年にナポリを征服し王位を獲得したアルフォンソ 5 世の下で、次いでニコラス 5 世が教皇となった聖なる教会群の下で、そして 1472 年のヴァレッタの包囲攻撃の時のフィレンツェ軍の下で、さらにヴェネツィアで 2 回、1466 年にはパデゥア市の護衛官として、そして最後には全レヴァントの指揮官となったのである。この伯父は、パチョーリに対して大きな影響を与えた。軍隊や建築学に関するパチョーリの初期の知識は、この伯父から得られたもののようである。パチョーリは、自分の本の中で、実際の問題からゲームを考案したり、またはゲームについて問題をモデル化するというアイデアを発展させたとき、これは伯父との議論を通して考え出したものと記述している。次のような実例がある。ある時、伯父は彼の部下に質問した。100 の小石を集め、その石を等間隔で、空き地に一直線に並べると、1 マイルを歩くのとどちらが早くできるかと。伯父は答えとして 1 マイル歩くよりは、石を規則正しく集めて置く方が早いことが明白であることを示した。

**IV** ピエロ・デラ・フランチェスカとの交際は、やがて、パチョーリをレオン・バッティスタ・アルベルティ(Leon Battista Alberti)との接触をもたらした。アルベルティは、画家、詩人、哲学者、音楽家そして建築家であり、かつ彫刻や建

築学に関する著書の執筆者であった。教皇パウロ 2 世の統治下、ピエロ・デラ・フランチェスカの指導に従って、パチョーリは、ローマへ行った。ローマでは、パチョーリは 1470 年から 1471 年にかけて、アルベルティとともに生活をした。1470 年パチョーリは 25 歳前後の年齢であったが、一方のアルベルティは、66 歳であった。パチョーリは、彫刻、絵画、建築学を偉大なアルベルティから直接に学んだ。さらにこれらの主題について彼の写本からも学習したのである。

パチョーリが、フランチェスコ修道会の教団に入る決心をしたのは、丁度ローマにおけるこの時期であったようである。厳密に言えばアルベルティは教会の会員ではなかった。しかし、彼はいくつかの教会の仕事に携わっていた。1472 年のアルベルティの死はパチョーリの入団を急がせたのかもしれない。ただ、パチョーリは、誓いに従って宗教上の教団に入ると述べているだけである。ルネサンスの時代にそのようなステップを約束することは、若者にとって一般的なことであった。特に彼らが教師か著述家として出世を求める場合には当然なことであった。それによって、強い宗教上の教団や教会は彼に援助を与えることになる。それによって個人的な教育の改善を得たり、また報酬を受ける教師の職を得ることも可能となったのである。

パチョーリは、まず 1475 年にペルージア大学で教えるためにペルージアへ出かけた。「大学は 3 年間の契約を私と結んだ、そして私は勤勉に仕事に励んだ」とパチョーリは、論述している。そして早くも 1478 年に、パチョーリは彼の地位と品位を保つために、給料の値上げを要求している。大学はパチョーリの要求に従った。なぜならパチョーリは、人間としても教師としても十分に優れていたからである。1478 年 2 年間の再任を申し込まれた。そこで彼は 1480 年までペルージアに留まったのである。最後の給料の支払日は、1480 年 12 月 11 日であった。したがって、パチョーリは 1475 年から 1480 年にかけてペルージア大学で教育に従事したのである。この期間、パチョーリは第 2 の稿本 (=写本) を完成し、青年たちに献呈したのである。

**V** パチョーリは、ペルージアへ行く以前から、有名かつ偉大なロヴェーレ (Rovere) ファミリーと親しかった。フランチェスコ・デラ・ロヴェーレ (Francesco della Rovere) は、フランチェスコ派の修道僧であり、ペルージアで教育に携わり、後に 1471 年から 1484 年にかけて教皇シクストゥス 4 世 (Sixtus IV) となった人物である。フランチェスコは甥のジュリアーノ (Giuliano) を若い時分からフランチェスコ派の中で教育した。パチョーリとジュリアーノは、同じ年であり、親しい友人となった。ペルージアでの仕事の約束は、最初の 3 年さらに 2 年は連続して行われた。そしてさらにもう 1 年の間、パチョーリは、十分な健康に恵まれなかったか、あるいは彼が深く興味を持っていたことを執筆するためには、教えることが煩わしかったようである。後年カルディナル・フランチェスコ・ソデリーニ (Cardinal Francesco Saderini) に本を献呈する際に書いた手紙の中でパチョーリは、次のように記述している「私の人生の中で私の不健康から私を救ってくれた

あなたのことを私は忘れることができようか」。カルディナルは、フィレンツェの有名なソデリーニ家の一員であった。ソデリーニと2人の息子は、パチョーリを何回となく助けたのである。

1481年、パチョーリはアドリア海沿岸ダルマチア地方のツァーラ(Zara)へ行く。そこで彼は第3番目の原稿の執筆にとりかかった。「1481年、私は、より難解な、かつ高度な諸問題を、ツァーラで論述した。」とパチョーリは記述している。1480年の前半に、パチョーリがイタリア以外の場所に旅したことが指摘されている。そして、正式な大学での教育を修了したのもこの頃のようなのである。やがて教団の長の命令により、彼はまたペルーシア大学へ戻ってくることになる。パチョーリは、フランチェスコ教団の長であったブレスチアのフランチェスコ・サンソーニ(Francesco Sansoni)の命令の下に行動したのである。6年後の1486年、パチョーリがペルーシアに戻った時、彼は自分の名前の前に、マジステル(Magister)という称号をつけていた。この称号は学問的研究に対する高い称号で、現在の博士号に相当するものである。この称号は大学において、医学と法律以外では与えられないものであった。この称号の受領者には、専門的講座を持つ権利が与えられた。1487年3月1日から1488年4月まで給料支払いの記録が残されている。パチョーリ自身、また他人によって採用された称号はいつも「聖なる神学と哲学の博士」(Doctor of Sacred Theology and Philosophy)または「聖なる神学の教授ルカス・パチオルス」(Lucas Paciulus, Professor of Sacred Theology)であった。

1487年、ペルーシアで、パチョーリは彼の読者たちに問い続けた、「愛すべきアウグストの町ペルーシアでの毎日の読書、講義、教授に疲れた私に同情を持ってくれる読者たちよ」と。彼がペルーシアに戻り、滞在し続けるということは、彼が花の都フィレンツェを不在にしているということでもあった。しかし、彼は毎日の多忙な日課を遂行し続けることができた。例えば、時折は、彼はローマを訪問し、そこで彼の昔からの友人、ジュリアーノ・デラ・ロヴェーレの宮殿を訪れることができた。ジュリアーノは、1503年から1513年に在位したローマ教皇エリウス2世(Julius II)である。

**VI** 1494年、パチョーリは、「数学・幾何・比及び比例全書」(Summa de Arithmetica Geometria Proportione et Proportionalita)をヴェネツィアで出版した。パチョーリは、「スムマ」出版の時まで、すでに30年間働き続けていた。「スムマ」には、いくつかの欠点があり、それは不適當な方法や有益な主題の欠損に原因があるとパチョーリは、考えていた。そこで彼は「スムマ」の誤りを修正しようと望んでいた。「スムマ」は、次のような内容から構成されている。

1. 算術及び代数学
2. 取引計算の使用
3. 簿記
4. 貨幣と交換

## 5. 純粹にそして特に応用できる幾何学

パチョーリは「スムマ」出版(1494年)までに、4冊の稿本を完成したと記述している。彼の第1の稿本は、1470年にヴェネツィアで完成され、ロムピアージ家の3人の息子たちに贈られたものである。第2の稿本は、1476年に作成され、ペルーシアの若者たちに贈られた稿本である。第3の稿本は、1481年にツァーラで完成した。パチョーリは述べていないが、第4の稿本も存在していたようである。パチョーリは、1493年末期に、ヴェネツィアで「スムマ」出版を進めていた。しかし、「スムマ」の簿記論の部分は、それ以前に完成されていた。ヴェネツィア共和国は、パチョーリに「スムマ」に対して10年間の著作権を与えている。「スムマ」は1494年に、パガニーノ・デ・パガニーニ(Pagnino de Paganini)によって出版された。しかし、10年後に、「スムマ」の中の簿記論の部分のみが、「商人の完全な教育」(La Scuola Perfetta dei Mercanti)のタイトルで、トスカーナで出版されたのである<sup>2)</sup>。スムマは決して独創的な作品(著書)ではなかった。パチョーリ自身が述べているように全書(総論)である。この作品は、多くの資料及び多くの著者たちの思想の集大成である。「スムマ」の主要な資料の出典は、1200年頃に執筆されたレオナルド・ダ・ピサ(Leonardo da Pisa)の作品であると、パチョーリは、記述している。パチョーリが、スムマの中で、出典の名を明確にしなかったとしても、読者はそれがレオナルドに負っていたことを理解するであろう。パチョーリはパチョーリが論述した複式簿記組織(the double-entry system of book-keeping)の出典について何も述べていない。パチョーリは単に200年以上ヴェネツィアで採用されていた簿記組織を論述したに過ぎないと述べているのみである。パチョーリは簿記論のみならず、他の部分でも剽窃の批判を受けている。パチョーリはすべての企業取引は、借方と貸方に基づく組織的方法で記録されるべきであると勧めている。商人は彼の財産目録を作成した後に3冊の帳簿を使用する。すべての取引は日記帳に記入する。例えば仕訳帳では、借方(=Per)現金//貸方(A)資本金と記入する。まず借方を記入し2本の斜線を引いて、貸方を記入するのである。この仕訳帳の記録はさらに元帳に転記される。元帳では、現金勘定の左側下に、資本金勘定の右側下に記入される。そして元帳の借方合計と貸方合計は一致する。それは簿記係が残高計算表を作成して明白となる。パチョーリは、若い時から簿記や数学に関する主題を論述する能力を有し、さらに学生たちに興味を持たせ、刺激を与えるための例題や簡単な表を作成する力を持っていた。パチョーリは、次のような言葉を力説している。「すべての行動は、明確な目的に従って決定されるべきである。」「何もしない者は誤りをなさず、誤りをしない者は学ぶことがない。」(パチョーリの本には)宗教的な戒めのない章はないのである。「神とあなたの隣人を思いなさい。」「寛大でありなさい、それによってあなたはあなたの富を失わないであろう。」パチョーリは、損失について述べる時、次のように祈るのである。「神はよきキリスト教徒として、真心を持って生きるすべての人々を、損失から守る。」

**VII** 「スムマ」は、イタリア中の人々の関心を集めた。それは、ミラノ公ロドヴィーコ(Lodovico)の目にもとまった。ロドヴィーコは、自分の宮殿、ミラノ大学そして 20 マイル離れたパヴィア(Pavia)大学等でたえず勉学に勤しんでいた。ロドヴィーコはパチョーリを彼の宮殿に招いた。そこでパチョーリは、数学を教えるために 1496 年にミラノへ行ったのである。ミラノでパチョーリは、有名な医者、法律家、そして画家たちと交際する機会を得た。その中にはレオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)がいた。レオナルドは、ミラノ公のために、ブロンズの大きな騎士像の創作に従事していた。そして、レオナルドは、パチョーリから数学の基礎を学んだ。すなわち、パチョーリは、大きな像に必要なブロンズの量の計算方法に関して、レオナルドを助けたのである。しかし、レオナルドは、不運なことに、その像を完成することはできなかった。またレオナルドは、彼の有名な絵画「最後の晩餐」にとりかかっていた。その頃、パチョーリは、ミラノで「デヴィナ」(Divina)「神聖比例論」と呼ばれる新作の著述に従事していた。この「デヴィナ」のため、レオナルドも図形の作成を手伝ったのである。パチョーリはミラノに着いたとき、最初は解放された空気の中で、多くの人と楽しむ気持ちでいた。しかしミラノでの学問的雰囲気刺激を受け、「デヴィナ」の執筆を決意したのである。パチョーリは、ロドヴィーコの科学と数学への理解ある環境の中で仕事をする事ができた。ミラノの図書館の中にはパチョーリが必要とする学問に関する多くの文献が収められていた。

パチョーリの肖像画は、多分 1495 年頃ヤコポ・デ・バルバリ(Jacopo de Barbari)によって描かれたようである。この絵は、ナポリの国立美術館に飾られている。そして修道士(=パチョーリ)が、彼の弟子であるウルビーノ公グイドバルド(Guidobaldo)にユークリッド幾何学を教授しているところを示している。グイドバルドは、彼の父フェデリーゴの後を継いでウルビーノ公になった人物である。パチョーリは、テーブルの前に立ち、グイドバルドはパチョーリの背後に、肘をまげて立っている。この絵を見る人は、パチョーリの厳しい、そして真面目な顔つき、頑固そうな顎に感動する。パチョーリの左手は、パチョーリが教えている開いた本の頁の上に置かれている。この本の主題は、幾何学であり、ユークリッドの翻訳本と思われる。パチョーリの右手は、指示棒を持ち、棒の先は、ある幾何学的図形が描かれた石板を指している。その右手の上には、水晶状の球体が掛かっている。この絵画は、時として「数学の実地教授」というタイトルが付けられている。

**VIII** パチョーリのミラノでの滞在はそう長くはなかった。なぜならフランスがミラノに進入し、公邸を占領したからである。レオナルドとパチョーリはミラノを去りヴェネツィアに向かったが、途中マントヴァにしばらく立ち寄っている。パチョーリは後に、マントヴァの君主と公妃に、チェスのゲームに関する稿本を献上している。この本は現存していない<sup>3)</sup>。1500 年代の初め、レオナルドとパチ

ヨーリは、フィレンツェに滞在し、親交を深めていた。この頃パチョーリは、フィレンツェ、ピサそしてボローニア等の大学で教えており、またローマやヴェネツィアでも公的講義をしたのである。1508年8月11日パチョーリはヴェネツィアで500人という限定された聴衆を前にしてユークリッドの第5の文献について講義をした。この講義は、聖バルトロマイ教会の中で行われた、その主題は比率及び比例に関するものであった。パチョーリはこの講義の中で比率や比例が宗教、医学、建築、絵画、彫刻、音楽、法律、文法さらにはすべてのリベラル・アーツといかに関連しているかを、初めて示したのである。パチョーリは自分の著書の中で、多くの参照資料について記述している。その中には、ソクラテス、プラトン、アリストテレス等哲学者の名前が見られる。特にこの3人の哲学者についてパチョーリは「これら3人の哲学者の文献を、私はたえず手元に置いていた。」と述べている。次の年パチョーリは、「デヴィナ」の出版の準備、さらには「ユークリッド」の改訂を始めていた。この年パチョーリは、多分60歳に達していた。したがって、多方面にわたる長年の努力から、彼は疲れを感じ始めていたことは確かである。当時のパチョーリの記述の中でパチョーリが長年の仕事の後に休息を望んでいたことは明らかである。「私は若い頃から、あまりにも勉強だけに集中する習慣がついていたので、幼年時代から勉学以外のことをすることがなかった……。」と述べている。この頃パチョーリは余生を気楽に過ごすことを望んでいた、そして生まれ故郷ボルゴ・サン・セポルクロの修道院長になった。しかしパチョーリとパチョーリの監督下にある修道士との間で不和が生じた。それは上級職（先輩たち）によってもたらされた少なくとも2つの事件に関連していた。1511年の末、パチョーリは、彼の生まれ故郷の公証人の所へ行った。そこで彼は、自分の死後の財産整理を目的とした遺言書の作成の準備をした<sup>4)</sup>。フランチェスコ派の修道会の会則では、修道士は財産を持たず簡素に服従の中で生活すべきであるとしていた。しかし、パチョーリは、尊敬すべきかつ神を恐れる信者ではあったが、次のように主張している。「私は、多額な財産、金貨に換算して300デゥカートに関する遺言書を作成するに十分な能力、権力、権威を持っている。」と記述している。財産を所有する権利は、1508年4月28日パチョーリの昔の友人教皇ユリウス2世(Julius II)の教書によってパチョーリに授与されたものであった。1513年から1521年にかけて教皇となったメディチ家のレオ10世(Leo X)が、1514年にパチョーリをローマ大学の教授として呼んだ。このことは我々が知りうるパチョーリに関する最後の情報である。しかし「スムマ」の第2版が、1523年に出版されている。したがって、パチョーリが1523年まで生きていたと信ずる理由も存在する。(ただし、このテイラーの論文の出版後の1979年に、パチョーリは1517年に死亡したという事実が明確となっている＝訳者注<sup>5)</sup>)

**IX** 多分、パチョーリが、後世に与えた影響について強調しすぎることはない。簿記についてのみ言えば、簿記の歴史に精通している人々は、パチョーリの簿記論が早くからドイツ語、オランダ語、英語による簿記書の著者たち、さらに



は間接的にアメリカの文献に及ぼした影響を知ることができる。さらにもしパチョーリが後世に与えた偉大な影響を見なければパチョーリが記述した他の多くの資料、特に数学と数学に関する主題を考察しなければならない。パチョーリは多くの他の主題は数学に関連していると主張している。パチョーリは宗教、建築、彫刻、絵画、軍事上の科学、実務、教育、執筆等、彼ができるすべてのことを学ぼうとしたのである。パチョーリの特徴は、まさに「初期ルネサンスの人物」であった。彼は知識を集め、それらを取捨選択し、日常生活に適することを学び得るように、若者たちのために整然と論述したのである。そして商人たちから簿記の知識を採用・執筆し、彼の弟子たちが利用するよう工夫したのである。パチョーリはユークリッドに関する彼の著書の一つの中で、読者に対しイタリア語を使用したことを解説している。「(ラテン語ではなく=訳者注) イタリア語を採用したことは読者に対する誤りとはならないであろう。なぜなら、それによって読者が読み易くなるならば、その主題は読者にとって実り多いものとなるからである。」この事は、パチョーリが、開拓者であり、重要な多くの種類の資料を発見し、それら資料から良い結果を生み出す成果を提供したことを示している。我々は、多才にして多くの事柄に精通していたがゆえに偉大なことを達成したルネサンス期の多くの人々の事を知っている。我々の近代教育の中には多くの誤りがあるかもしれない。なぜなら我々はあまりにも専門的になりすぎてその結果、全体が見えなくなっているかもしれないからである。かくして我々の会計に対する専門化はあまりにも狭くなりすぎている可能性がある。そこで、法律上の勉強を加え、法律とともに会計の教育を進めるべきである。多分、経済上のよき学習は会計と法律の両方にとって必要なのである。我々の生活の中で、我々は多方面の研究に依存している。しかし我々がそれらを学ぼうとするとき我々は常に別々にそれを取り扱うのである。

**X** パチョーリが彼自身知らなかったことを開発しようと試みたことは興味あることである。実際に取引が行われている市場で彼は簿記を学んだのである。パチョーリは簿記の価値を知るや直ちに簿記を学生たちが利用できるように論述したのである。幸運にも印刷技術はパチョーリを助けた。パチョーリは早くから数学特にユークリッド幾何学の社会への必要性を理解していた。1800年以前（正式には2000年以上前=訳者）に考えられたユークリッド幾何学の重要部分を判断しかつその知識を広めるために印刷技術を採用することの必要性が存在していたのであった。そして多くの学生たちに教えるために、もしアラビア数字が採用されず、イタリア語が使用されなかったならば、印刷された数学書は流布しなかったであろうということを見抜くセンスをパチョーリは持っていたのである。我々は、パチョーリを翻案者(adapter)というよりは、むしろ創作者(originator)として考えるべきである。

パチョーリは、すべての人々に教えることに成功した。そして出来ること、出来ないことの間での区別を明らかにする能力を持っていた。さらにパチョーリは彼の

あらゆる人生の中で多くの友人を持ったことは明らかであり、彼らと話し、彼らから受けた影響について記述した。彼の弟子の中で、時折あまりに強い彼らの熱意に対しては「君たちはあまりにも多くのことを知りたがっている」とパチョーリが非難したことを回想している。また他の弟子はパチョーリが教えることについて彼に次のように忠告したのだ。「あなたはたくさんの信心深い人々に対し告げることが研究しなければならない。」その時代の多くの弟子たちは数学と数学に関連する学問をパチョーリ自身とパチョーリの著書から学んだのである。パチョーリについてより多く知ろうとする後世の人々はパチョーリの論述した論文の中に最もよく、そして信頼できる情報を見出す。他の資料はパチョーリが教えた場所や大学の記録にある。芸術及び数学の歴史はパチョーリと彼の与えたものについてよりよく知るための助けとなる。彼の人生と彼の影響力は多くの資料の中から見出されなければならない。

#### <訳者注>

- (1) 家族階級とは一例として、都市国家フィレンツェにおけるメディチ家、パッツィ家、サルヴィアーティ家等を指すものと思われる。
- (2) ドイツ人のワグナー(Wagner)は1802年マグデブルクで出版した簿記書『新完全かつ一般的簿記教科書』の中でルカ・パチョーリが論述した複式簿記の論文が、『商人の完全な教育』(La Scuola Perfetta dei Mercanti)というタイトルで1504年にヴェネツィアで出版されたと記述している。しかしこの本はいまだ発見されたことがない。
- (3) 失われたとされていたチェスゲームに関するパチョーリの作品はその稿本が、2006年に発見されたという事実が三浦伸夫教授によって報告されている。三浦伸夫「数学教師としてパチョーリをみる」神戸大学「凌霜」398,2013年8月。
- (4) パチョーリは1508年と1511年に、遺言書を2回作成している。1508年は自筆の遺言書であり、1511年のものは、公証人が作成したものである。片岡泰彦、『複式簿記発達史論』大東文化大学経営研究所、2007年3月、99頁。

(The Pacioli Society Japan 2017.04)

このご寄稿原稿は、ルカ・パチョーリ没後五百年を記念して、片岡泰彦先生のご厚意で提供いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

代表世話人三代川正秀

The  PACIOLI  SOCIETY  JAPAN

日本パチョーリ協会 〒171-0044 東京都豊島区千早3-4-2 三代川正秀  
Tel. 03-3955-8783 [Email. mpacioli@aol.com](mailto:mpacioli@aol.com) <http://pacioli.world.coocan.jp/>